

幼児と保育

幼年期の情操教育について、早川元二・山村きよ両氏の共同研究を中心とした特集は読みごたえがある。和やかな家庭が第一」という村岡花子氏の訪問記には

じまり、井坂行男氏の「三つ子の魂百まで」では、幼児期のしつけの重要性がとかれていいる。「幼児期の子どもは何といつても情緒ないし感情が中心となつていいる。(中略)道徳的な情操についても、なぜそうしなければならぬかといった知的なもの、背景からではなく、そうすることの喜びや楽しさを身に味わせる時期なのである。そしてその喜びや楽しみは、行為そのものからくるものであるよりも、その行為に対して与えられる親とか先生とかからの是認の賞讃

によつて生ずるものであるといえよう。だからこそ幼児期においては周囲のおとなの影響がもつとも大きいのである。(後略)」以上は、この時期の子どものしつけのあり方を明示するものであろう。

「幼年期の情操教育」では、実際に幼児の情操をゆたかに伸ばす上におこつてくる問題と、それを解決する方法がとりあげられており一読をすすめたいものである。

その他、手塚又四郎氏の「彫刻とあそぶ子どもたち」の中で、北欧のカクツムリの砂場の話などたいへん興味ぶかい。また、品川孝子氏の「子どもをみる目」は、月号は「けんかも子どもを伸ばす」であるが、これも、しつけのやさしい解説として楽しく読める。

保育ノート

長い夏休みを終つて迎えた第二保育期にあたつて注意すべきこと、考えなくてはな

らないこと、具体的な扱い方などが、いつものように自然・ことば・絵画製作・音楽リズム・社会(あそび・社会かんさつ・生活指導)健康という保育の各項目についてのべられている。

そのほか今月の特集としては「特殊才能にめぐまれた子ども」となつていいる。内容は、①「特殊才能のみわけかた」(竹田俊雄氏) ②「幼児の音感教育」(井上範子氏) ③「知能の高い幼児の教育」(村山貞雄氏) ④「親の態度の指導」(松村康平氏) で、特殊才能およびそれにつれて考えられることがいろいろの角度から書かれていいる。

題名にもあらわれていいるように特殊才能という場合、幼児では音楽や絵がおもな問題となる。とくに音楽の場合は問題が多い。野心をもつおとなの考に影響され、子どもがむちゃくちゃに扱われているということをしばしば聞く現在、世の中の人が、子どもをかたよらない人間に育て上げてから専門の方にすすむ という正常な考えに

もどることを期待している。

その点、②では、特殊教育としてはなく、園児全体に遊びとして興味をもたせるようにしながら音感教育をしてきた体験が書かれている。こういう資料の少ない現在、興味のあるものである。④では、特殊才能を持つ子どもの親の態度を三つの型にわけて述べてある。

保育の手帖

グラビヤの新中国の子どもたち、本文の守られている中国の母と子、の記事は新しい中国の状況をよく物語っており眼をひかされる。筆者は訪中婦人代表全社協保母の会委員長の梅森幾美氏。国家建設のため婦人の活躍が拡大し、それにもなつて母体保護と託児施設の整備ということをよく考へている点が強調されている。

リズム感のない幼児の指導についての質問を長谷川新一氏（指揮者・東京少年合唱

隊主宰者）が答えておられる。現場ではそれに近い問題によく直面するので、参考に抜すいさせていただく。音痴には音の高低を正しくうたえない旋律音痴と、音の長短を正しく表現できないリズム音痴との二つがある。発育不十分な幼児には、これらの欠陥がままあるが、おとなになってからの実際の音痴というものはほとんどくない。

聴覚の発育不十分な幼児の場合には、これらの欠陥を見いだし、個人指導をする。幼児のころにリズム感、音程感の悪いものを個人指導して正しいものをつかむようになった例は多い。何よりも根気よく幼児の間に個人指導をするのがよい。毎日二、三十分音の高低を指導し最初の第一音を正確にとれるようにし、段々につきの音程へと教える。リズムでも二拍子のやさしいリズムから指導者と同じに打てるようにする。一つの形が正しく打てるようになれば心配ない。以上、具体的指導法もかかれていますし、周囲の人や本人も音痴という固定観念

を持つてしまうことが、いかにつまらないことがよくわかるのである。

幼児の絵について、霜田静志氏が、今月号から筆を執られている。児童画に対する興味や研究のことがかかれ、絵の指導には心理学者や幼児画の研究者の間にいろいろ説もあるが、保育目標としては創造性を育てることに意見が一致しているということである。指導の方向などについて、研究の結果や御意見を来月号もつづけて読んでいき、自分のとっている指導法とあわせ考へていきたいものである。

保育

巨次をみると、何か新しいものはないか、参考のものはないか、まずわれわれはこう期待してみる。月刊なるものは、連続のものも多く、取材は真新しくはないが、つねに同じ指導者が、あけるごとに顔をのぞくのはこう一年間続いてみているといさ

さか、またかという顔もしたくなる。一冊の本をみることを考えればまたちがうだろうが、毎日を忙しく、しかも勉強したい幼稚園の教師には、少からず、広き指導者の声が聞きたく、勉強したいものである。

九月号の保育の目次を紹介しよう。

幼児の視聴覚保育(2) 阪本越郎

たのしく教育的な幼児の時間の番組を

武井照子

保育にとりあげた幼児開放送の実際

勝田 節

以上は字のごとく視聴覚に関することであり、いずれも実際にやくに立つ。

莊司雅子氏の「幼児の成長発達に必要なものは、現在、種々の方向にすすむ保育方針に対して活を入れていただいたようである。新まいも、老練もともに読んで勉強し、反省すべきことだろう。

月刊保育カリキュラム

今月の「望ましい教師の姿」は莊司雅子氏が書いていられる。じゅうらいのわが国の一般的な考えかた(幼稚園の先生は、いちおう、歌って踊って絵がかければ、とくべつな教育を受けなくてもなれる)を一掃して、もっと高い、学問的教養を身につけ、洞察力をもって子どもひとりひとりをはんとおの意図でしり、正しい指導をしなればならないことを強調し、よい幼児教育者の備えるべき条件をいろいろあげていられる。一読したい頁である。

平井信義氏、千羽喜代子氏の「幼児の栄養について」は、子どもたちのおべんとうの指導に対して、まず基本の栄養素の理解が第一として四つの栄養素について説明されている。さらに栄養の摂取量、幼児期の栄養のあたえ方が示されていて、これから食欲のすすむ秋に、大いに知識を得て、同じ食物でも活用し、おいしくて栄養あるおべんとうになるよう、親たちとともに勉強したいものである。

保育内容の中では、たのしい夏休みを語りあい表現しあうことが各部でとりあげられているが、音楽リズムもその一つ。山の生活、海の生活を一つの音楽の流れによって遊ぶことは、子どもたちは喜ぶに違いない。一方法を紹介してあるので参考になると思う。

植松治子氏、鈴木とく氏の「三歳児の保育技術」は、幼稚園、保育園の各立場から、この頃の子どもに適切な指導を細かに書いていられるので、むつかしい三歳児の指導の一助となることと思う。

保育の友

この四月から、はじめて保育という仕事にたずさわりだしたばかりの者にも、もう半歳という保育生活の月日が流れた。九月という月は、一応このへんのところまで半歳の保育経験を反省し、将来への道をたてなおす必要がある。

その点で、四人の保育者が経験と抱負を語る本号の座談会「わたしは保母一年生」という記事が参考になる。彼女たちは、過去の保母の向上をばんできたものは「保母という仕事は天職だとか、何ごとにもたえしのぶという犠牲的精神であった」と批判し「私たちの保母生活はたしかに苦しい。お風呂にもゆっくり入れぬありさまだけれども、私たちはへこたれない。」と語り、さらに「互に手をとりあつて行こう。保育という仕事を腰かけ程度に考えないで、結婚し、子どもが生まれても続けられる職場にしよう。」と力強くうたいあげている。「保育のコツ」という記事が次にある。こうした熱心な保母一年生たちには、コツを教えることは早すぎるかもしれない。しかし、結論としてでていることは「コツとは要領よくやるということではけつしてない。たえざる研究によってのみ生まれる優れた教育技術、これがまことのコツである。」と説明している。六人の保育園園長が

随筆的に書いていられるけれども、コツ論には、どれも一本背骨が通っているという感じがする。

講座「子どもの健康」は面白い点をつけている。それは子どもの健康は、落度のないうように世話してやることではなく、もっと積極的に、子ども自身に体のことを知らせてやる必要があるとし、称して「幼児たちの生理学」を教えている。

このほか、梅森幾美氏の「中国の託児所の紹介」が記事として目新しい。

幼児の指導

幼稚園の行事の中で最も子どもたちに喜ばれ、またおとなたちから期待されている運動会についての特集が目をひく。

運動会のねらい、役割と分担、種目の選択。練習のあり方、賞について、新しい遊戯などについて、書かれているので、子ども本位に楽しい運動会を考える一つの手掛

りとなるであろう。

連載の「世界の子どもたち」中国のおおらかに育つ子らの一文も興味深い。昔のすきをねらつては、ちょっと置いたものをかすめてゆくずるさ、人を見れば何かほしそうにおもねる態度など、新中国の子どもたちの中には見る事ができない。小ぎつぱりとして、にこにこ明るく、人なつっこい子どもばかりで、おどおどしたり、はしゃいだりすることもなく、何となく大らかに感じるといふことや、中国の家庭や隣同志では、子ども的人格も認めあつていふ実際の例など、何ものにもゆがめられないで、すくすく育つてゆく中国の子どもの幸福を祈りながら、読むにふさわしいものである。

保育界ニュース、文部省の国公私立幼稚園の実態、および、昭和三十一年度の身体検査の結果の発表なども参考になる記事である。